

コラム2 一寺田虎彦の自然災害に関わる箴言一

物理学・地震学の権威であり随筆家としても知られる寺田寅彦（1878年～1935年）は、自然災害などに関連していくつかの箴言を残しています。その一つが『正しく恐れる』です。この箴言は、寺田寅彦の「小爆発二件」（青空文庫）に『ものをこわがらな過ぎたり、こわがり過ぎたりするのはやさしいが、正当にこわがることはなかなかむつかしいことだと思われた』という記述に基づいています。

東日本大震災における福島原発事故後、原発災害への不安感の高まりとともに、原子力や放射能について知識がないことが不安を煽る要因にあることから、「災害や原発リスクについてより深い知識を得、状況を理解して対応する」という意味で引用されています。『正しく恐れる』ことの重要さをあらためて考えることが大切です。

また、寺田寅彦随筆集の中では、『人間も何度同じ災害に会っても決して利口にならぬものであることは歴史が証明する。東京市民と江戸町人と比べると、少なくとも火事に対してはむしろ今のほうがだいぶ退歩している。そうして昔と同等以上の愚を繰り返しているのである。』あるいは防災対策ができていない実態を指して、『天災が極めてまれにしか起こらないで、ちょうど人間が前車の転覆を忘れたところにそろそろ後車を引き出すようになるからであろう。』と述べています。

これらは、まさに、「天災は忘れた頃に来る」という箴言になっています。私たちは、東日本大震災を契機にこの二つの箴言を肝に銘じて行動することが求められています。